紹介

●Eurasia Septentrionalis Antiqua IX
Minns Volume　　Helsinki 1931.

本年の同誌はE・H・ミンス教授の祝賀論文集(ユービレウム)としてタルグレン教授の文以下三十二の論説を收錄して居る。次にその二三の内容を紹介するなれば、

『テッサリーとトリポルイエ』A・ウエース

トムソンと共にかの「有史以前のテッサリー」を著はしたウエース氏が、同書の出版された一九一二年頃より論ぜられ、今日恰も定説とまで見られるに至つたテッサリー地方の彩色土器と所謂トリポルイエ＝ククテニ文化との關係に就いて氏の見解を示したもので、特に「歐羅巴文明の黎明」等に見えるG・チアイルドの説を詳細に吟味し、兩者の土器は紋様及び彩色の點に類似點あるもなほ同一ならずとする自らの舊論のにはかに捨て難きを述べ、希臘の新石器時代文化の研究は、これを近邦のそれと比較するには未だ不充分たるを免れず、かくてチアイルドの説の如きは魅力あるものではあるが、これによつて云爲するは砂上樓閣を重ねるものと言ふ外はないと論じて居る。

『ルリスタンと西方諸國』　T・J・アルネ

近年歐洲學界を賑はしたルリスタンの青銅器がコーカサス地方の青銅器時代及び初期鐵器時代の遺品と密接な關係にある事は既に世に論があるが、更に北伊・中歐・スカンデナヴィア等西方の諸國とも相互に關係を有した事をプローチ、留セン、裝身具銅斧器等に就いて例證し、このルリスタンと西方との關係は青銅器時代及び初期鐵器時代に於てはアッシリアー小亞細亞―北伊―中歐と經由して行はれたのであらうと述べて居る。

『コーカサストルリスタン』　F・ハンカル

ガンザ・カラバー文化、青銅時代のタリス文化、レルヴアール文化、コーバン文化等の各項に分ち六十五頁に渉つて、各文化の青銅器の特質と相互の關係並びにルリスタン文化との關係を詳細に論述し、紀元前十四世紀より八世紀に渉りコーカサス地方に榮えた文化を代表するものが、右のガンザ・カラバー、タリス、レルヴアールの三文化であつて、ルリスタン文化との一致は一はこの兩者の間に永く存した金屬貿易路に基く緊密な交渉を、一は兩者は共に紀元前二千年代の末葉より一千年代の初頭に渉る「前亞細亞文化」に屬する事を示すものであるとなし、更にルリスタン文化の特質はコーバン文化にも求められる外に、紀元前六世紀に降る北コーカサスの鐵器文化にも求め得る事を詳述して居る。

『オルドス青銅器の位置に就いて』　J・ウエルネル

アンダーソン教授等の蒐集以來著名となつた北支那發見の所謂オルドス青銅器の年代に就いて論じたもので、まづセレンガ

河畔の古墳、カタンダの古墳、ノイン・ウラの古墳等の發見遺物の示す動物樣式と、オルドス青銅器に於けるそれとの間に著しい類似がある故に、これをオルドス群なる下に一括し得べき可能を述べ、次にセレンガ古墳より五銖錢を、カタンダ及びノイン・ウラよりは紀元前一世紀の紀年銘を有する漆器を發見したのを以て、オルドス群（ガルツ）の持つ年代の上限を劃するものとなして居る。然して紀元前一世紀の中葉以降漢の武力に匈奴が服して北境に和平の狀態の現出した時代こそオルドス青銅器の占むべき位置であつて、その前後の事情は明ではないが、概れ紀元前一世紀より一世紀に渉る間にその製作が行はれたのであらうとして居る。

『支那古代史の一因子としての馬』　P・イ　ヒ　ッ

紀元前二世紀の頃より漢の北方遊牧民（匈奴）に對する種々の政策は西方文物の移入と言ふ結果を將來したのであるが、就中在來種のものより遙かにすぐれた良馬を大宛國に求めんとした試みは遂に支那文明に大なる變樣を附與する西方文化の流入となつた事を述べ、更に佛敎の傳來の如きもかくの如き關係に於て生じ得たとなし、支那古代史上「馬」の閑却すべからざる所以を論じて居る。

その他本書には次の諸論文を收めて居る。

A. M. Tallgren; Sur les monuments mégalithiques du Caucase occidental

M. C. Burkitt; Some Reflexions on the Aurignacian Culture and its Female Statuettes

N. Makarenko; Neolithic Man on the Shores of the Sea of Azov

N. Vulić; Le site de Troie

V. G. Childe; Eurasian Shaft-hole Axes

D. Berciu; Ein hallstättisches Brandgrab aus Balta-Verde.

I. Nestor; Ein Thrako-Kimmerischer Goldfund aus Rumänien

M. von Roska; Die frühcisenzeitliche Brandfigur von Pér

V. Antoniewicz; Vase en bronze de Volhynie

B. Fillow; Ein "skythisches" Bronzerelief aus Bulgarien

W. W. Arendt; Sur l'apparition de l'étrier chez les Scythes

V. Scerbakivskyj; Zur Agathyrsfrage

M. Rostovtzeff; A Gold Necklace and a Gold Armlet from S. Russia

Fr. W. von Bissing; Ein Schildmodell römischer Zeit aus Memphis

V. Tolmacheff; Les antiquités Scythes en Chine

N. Toll; Bronze Plaque from the Collection of Count E. Zichy

A. Alföldi

Zur historischen Bestimmung der Avarenfunde

N. Fettich; Zum Problem des ungarländischen Stils II.

A. Salmony; Eine chinesische Schmuckform und ihre Ver-

breitung in Eurasien

A. Zakharov; The Statue of Zbrucz

C. G. Seligman; Bow and Arrow Symbolism

J. G. Andersson; Some folk-lore Notes in Hulsunds Jabonah.

B. Nerman; Swedish Viking Colonies on the Baltic

F. Kivikoski; Eisenzeitliche Tontatzen aus Åland

F. D. Kendrick; Some Types of Ornamentation on Late Saxon and Viking Period Weapons in England

F. Balodis; Ein Denkmal der Wikingerzeit aus Semgallen

N. Cleve; Finnländische runde Fibeln der Wikingerzeit aus Osteuropa

（山本）

● Tombs of Old Loyang.

A Record of the Construction and Contents of a Group of Royal Tombs at Chin-tsun, Honan, probably dating 550 B. C.

Shanghai 1934

W. C. White

昭和四五年の頃から河南省洛陽東郊金村出土と稱せられる古器物が夥しく世に現れ、その多量であること、華麗なこと、そしていはゆる秦式で珍奇な形式に富むことから、夙に注意されてゐたが、殊に屬氏鐘・嗣子壺など紀年の銘文を有する點で支那の學者間にも華々しい論議をまき起した。蓋し近年における大盜掘であつて、その重要さは往年の河南新鄭古器物にも優るものであるが、遺物はその時よりも不幸な狀態で、全然散佚し盡し、いまでは世界各地に分藏せられてゐる。ところが、開封在住のホワイト氏が親しくその地を調査し、發掘者の言を蒐めまた散佚して行く遺物を記錄にとゞめて、遂にこの一書をものせられたことは實に不幸中の幸であつて、この書を得て喜ぶのはひとりわれわれ考古學者のみではあるまい。

洛陽の東三十五支里、邙山の下に全く同形式の古墓八基と、なほいくらか形式のちがふ小さい墓三基が發掘されてゐる。地上には何らの封土なく、元來は坦々たる平地で、いまはたゞ上げた土が盛上つてゐるのみである。墓室は深く、地下四十七呎はあり、各々幅十呎長さ二百五十呎位の長い隧道が南面に走り、またその左右に平行して、土人が馬坑と稱する車馬を副葬した墓坑（十呎に五十呎、深十乃至十二呎）がある。これらは全部掘り浚へられた譯ではないが、發掘者のボーリングによつてよく調べられてゐる。隧道は北に向つて下降し、深さ四十七呎の墓室に連る。墓室は徑二十呎弱の八角形で、ほゞ一呎角の角材を並べて作る。床は南北に走る角材一層、壁は角材を五つ重れ、天井はまゞ南北に走る角材一層に次いで東西に走る角材を一層重れてつくる、その上には木炭層と礫層とを以つて交互に三回づゝ掩ふ。床材の下には長四呎、幅二呎、厚四吋の石板を並べる、入口は南側にあるが、いま扉の類を存しない。壁・天井には暗褐色の漆を塗るが、壁の上部には幅一呎のフリーズを作り、塗金金具を嵌め、また白・朱の彩具で、龍か鳳凰の如きも